

# ある中露字典の漢字音について

吉川 雅之

## 目次

1. 諸言
2. 文献学的情報
3. キリル文字音標
4. 推定音価とその体系
5. 漢字音の主な特徴
6. 結語

## 1. 諸言

ライデンはオランダ国内に於ける東洋学の中心地たるのみならず、欧州に於ける東洋学の一大拠点でもある。その蓄積を我々はライデン大学の所蔵物に実感することができる。特に、1587年に開設されたライデン大学図書館は、その草創期以来東洋学に関わる文献を収蔵してきたことで知られており、その収蔵物は「東洋学コレクション」(Oriental Collections)と称されている。

Kuiper (2005: iii) に拠ると、ライデン大学図書館の中央図書館 (Central Library) に所蔵されている抄本は、書架番号に Or. を冠する「東洋学抄本」(Oriental manuscripts), Acad. を冠する「王立アカデミー借り受けコレクショ

ン」(Royal Academy loan collection), BPLを冠する「ラティナ公立図書館抄本」(Bibliotheca Publica Latina manuscripts)の三者に分類される。「東洋学抄本」の大多数はインドネシア由来と中東由来のものである。「東洋学抄本」はレフィヌス・ヴァーナーの遺産(Legatum Warnerianum)の一部分を構成している。「王立アカデミー借り受けコレクション」はオランダ王立芸術科学アカデミー(Royal Academy of Arts and Sciences in Amsterdam)に属するものであるが、ライデン大学中央図書館が永久借り受けをしている。この抄本コレクションは1837年にオランダ国王ウィリアム一世がその全体を購入して、王立アカデミーに寄付したものであり、その時点で公有財産となっている。「ラティナ公立図書館抄本」は西洋語で記された抄本の大型コレクションである。

中国関連の文献はというと、刊本の殆どは漢学院(Sinological Institute)に、抄本の多くは中央図書館に所蔵されている。後者の内、「東洋学抄本」に分類されるものには、早期のものとして17世紀と18世紀のものが含まれている(Kuiper 2005: iii)。また、「東洋学抄本」には漢字で記された18世紀から20世紀にかけてのヤオ族の文書が約30点含まれており、その大部分は道教の文書である(Kuiper 2005: iii-iv)。「王立アカデミー借り受けコレクション」に分類されるものにも17世紀と18世紀のものが含まれている。「ラティナ公立図書館抄本」に分類されるものは、主に19世紀のオランダの中国学者フレイス(Carolus Franciscus Martinus de Grijs. 1832-1902)、スハーリエ(Maurits Schaalje. 1840-1899)、ホフマン(Johannes Josephus Hoffmann. 1805-1878)が残したものである(Kuiper 2005: iii)。

筆者はこれまでに数回ライデン大学図書館で文献調査を行う機会を得た。小論では、2012年7月と2016年6月に調査を行った一冊の中露字典を基礎資料とし、そこにキリル文字で記された漢字音について論じる<sup>1</sup>。

---

1 キリル文字で記される漢字音とそれから帰納された音価を小論で併記する場合、

## 2. 文献学的情報

小論の基礎資料たる中露字典はBPLに分類される、一冊に製本された手稿である。ライデン大学図書館の所蔵する中露字典の抄本はこのBPL2176一点のみである。本書の内容について考察を試みた著述はこれまでに存在しない。Kuiper (2005: 152)によると、本書はその見返し遊びに鉛筆で記された「1850」が著された年であり、ブリル社 (E. J. Brill) が1920年5月3日から12日まで主催したオークションに出品されていたものを、ライデン大学図書館が購入したものである。以下、この新発見の資料に対して筆者が行った調査の結果に基づいて記す。

本書の装丁は洋装であり、背は茶色の革、表紙は黒・黄色の装飾文様を施した厚紙である。背には書名「КИТАЙСКИ/РУССКОЙ/СЛОВАРЬ」を刻す(斜線は改行を表す)。本文の料紙の判型は縦23.3 cm、横20.3 cmである<sup>2</sup>。

本書の構成は以下のとおりである。見返しの後は遊び紙が1枚、部首一覧を記した紙が1枚、白紙が3枚、声調を表す補助記号についての簡単な説明を記した紙が1枚と続く。説明を記した紙の最上部には頁数7が記されている。その後には字典本文が続くが、最上部に記された頁数は8に始まり、407に終わる。続く408頁から414頁左欄までは、中国史上の人物名や典籍名を記した附録である。414頁右欄から417頁までは漢数字が記されている。その後は白紙が5枚続いて終わる。尚、13頁から15頁までは漢字(親字及び少数の語例)

---

スラッシュ (/) の前に本書の音標、後に筆者による推定音価を記す。尚、\*は本来比較言語学に於いて、特に再建された推定音価であることを表すのに用いられる記号であるが、小論ではこれを文献に記された情報から推定した音価を表示するために借用する。

2 2016年6月16日に筆者がライデン大学図書館で計測。

のみが記され、音標と釈義は記されていない。また、16頁と17頁は白紙のままであるが、18頁に二部に属する字が記されていることから、本来乙部と丨部に属する字が配されるはずであったと考えられる。34頁と35頁も白紙のままであり、本来人部に属する字が配されるはずであったと考えられる。

字典本文及び附録、漢数字を記した紙は罫線によって左右2欄に分かたれている。字典本文は各欄とも基本的に親字として漢字4字を配し、附録は各欄とも基本的に10語を配す。字典本文の親字は原則として改行して記されているが、400頁以後は403頁の「鱗」や407頁の「齡」のように改行せずに記された親字が目立つ。改欄した冒頭には必ず親字が記されている。また、部首を改める箇所では改欄することが多い。

字典本文に立てられた部首の総数は214であり、収録された親字の数（異体字を含めず）は計2,950である<sup>3</sup>。部首は表1に示す順で立てられている。表1の右欄に記した数字は当該部首に収録された親字の数である。尚、本書冒頭に掲げられる部首一覧では、表1の170番「卩」までしか記されていない、「氏」と「气」の順序が逆になっているなど、字典本文との間に部分的な不一致が認められる。

【表1】 本書の本文に立てられた部首と収録された親字数

順 番	部 首	開始頁	最後の親字	親字数
001	一	8	並	17
002	丨	11	串	5
003	丶	12	主	4
004	ノ	13	乘	11
005	乙	14	亂	8

3 Kuiper (2005: 152) は2,924字と記すが、これは本書407頁に記された数字に従った情報だと思われる。

ある中露字典の漢字音について

006	丿 <sup>4</sup>	16		
007	二 <sup>5</sup>	17	亟	4
008	ㄥ	19	亮	10
009	人イ	21	優	106
010	儿	40	兢	13
011	入	43	兪	5
012	八	44	冀	11
013	冂	46	冕	4
014	冫	47	冤	5
015	冫	48	凝	12
016	儿	50	風	3
017	口	50	函	4
018	刀リ	51	劑	29
019	力	56	勸	22
020	勹	60	包	3
021	匕	60	北	3
022	匚	61	匪	3
023	匚	61	區	4
024	十	62	博	11 <sup>6</sup>
025	卜	64	卦	3
026	冂	65	卿	11
027	厂	67	厲	7
028	厶	68	叅	5
029	又	69	叛	8

- 4 丿部及びその所属字は本書には記されていないが、白紙となっている16頁に本来この部首が記されるはずであったと考え、表中に補っておく。
- 5 二部の開始は白紙となっている17頁であったと考え、表中に補っておく。
- 6 本書には10と記すが、これは「博」の直前に記されている、取り消し線が施された親字を含めない数であろう。

030	口	70	嚼	82
031	口	81	團	13
032	土	82	壤	50
033	士	88	壽	5 <sup>7</sup>
034	久	89	叅	2
035	攵	90	夏	2
036	夕	90	夥	7
037	大	91	奮	20
038	女	94	媼	57
039	子	101	孽	18
040	宀	103	寵	49
041	寸	109	導	10
042	小	111	尙	4
043	尢兀允	111	就	3
044	尸	112	屬屬	18
045	巾	114	屯	2
046	山	115	巖	12
047	川	116	巢	5
048	工	117	差	6
049	己	118	巽	6
050	巾	119	幣	18
051	干	122	幹	6
052	幺	123	幾	5
053	广	124	廬	24
054	廴	127	廻	5
055	井	128	弊	3
056	弋	128	弑	3

7 本書には10と記す。表中の数字は筆者の行った調査に拠る。

ある中露字典の漢字音について

057	弓	129	彌	14
058	冫	131	彝	4
059	彡	131	影	6
060	彳	132	徽	26
061	心卜小	136	懿	118
062	戈	149	戴	16
063	戸	151	扈	6
064	手扌	152	攀	76
065	支	161	岐	2
066	支攴	162	斂	26
067	文	165	斑	3
068	斗	166	斟	4
069	斤	166	斷斷	7
070	方	167	旗	12
071	无	169	既既	2
072	日	169	曆	47
073	日	175	會	11
074	月	177	膝膝	11
075	木	178	欒	90
076	欠	189	歡	12
077	止	191	歸	8
078	歹	192	殫	13
079	殳	193	毅	7
080	母	194	毒	4
081	比	195	毗	3
082	毛	195	毳	3
083	氏	196	民	3
084	气	196	氤	3
085	水氵彳	197	灌	125

086	火	212	爛	38
087	爪ハ	217	爵	5
088	父	218	爺	3
089	爻	218	爾	3
090	月	219	牆	4
091	片	219	牘	6
092	牙	220	孛	2
093	牛牛	221	犧	11
094	犬彡	222	獻	28
095	玉王	226	瓊	30
096	玄	230	率	3
097	瓜	230	瓢	3
098	瓦	231	瓶瓶	2
099	甘	231	嘗	4
100	生	232	甦	4
101	用	232	甯	3
102	田	233	疊疊	21
103	疋	236	疑	4
104	疒	236	癡	16
105	夨	238	發	4
106	白	239	皇	5
107	皮	240	皴	2
108	皿	240	蓋蓋	15
109	目四	242	瞽	27
110	矛	246	矜	2
111	矢	246	矰	8
112	石	247	礮	14 <sup>8</sup>

8 本書には12と記す。表中の数字は筆者の行った調査に拠る。

## ある中露字典の漢字音について

113	示ネ	249	禱	22
114	内	252	禽	2
115	禾	253	穠	33
116	穴	257	寵	18
117	立	260	競	9
118	竹	261	籟	33
119	米	265	糧	14
120	糸	267	織織	75
121	缶	276	餅研	3
122	罔 <sub>四</sub> 罔 <sub>九</sub>	277	羅	11
123	羊	278	義	8
124	羽	279	耀	10
125	老	281	耆	4
126	而	281	耑	4
127	耒	282	耦	6
128	耳	283	聾	15 <sup>9</sup>
129	聿	285	肇	6
130	肉月	285	臟	45
131	臣	291	臨	4
132	自	291	阜	3
133	至	292	臻	4
134	白	292	舊	8
135	舌	293	舔	4
136	舛	294	舞	3
137	舟	294	船	3
138	艮	295	艱	3

9 本書には14と記す。これは親字「聽」を含めない数であろう。「聽」は親字のみが記されており、音標、釈義及び語例は記されていない。

139	色	295	艷艷	2
140	艸	296	蘭	84
141	虺	306	虧	10
142	虫	308	蠻	33
143	血	312	衆	3
144	行	313	衢	11
145	衣衵	314	襲	29
146	西	318	覆	4
147	見	318	覩覩	11
148	角	320	觸	4
149	言	320	讓	105
150	谷	333	豁	4
151	豆	334	豔	6
152	豕	335	豨	7
153	豸	336	狸	8
154	貝	337	贖	42
155	赤	342	赫	4
156	走	343	趨	10
157	足趾	344	躡	28
158	身	348	躡躡	4
159	車	348	轟	24
160	辛	351	辯	7
161	辰	352	晨	4
162	辵辵	353	邁	71
163	邑卩	362	鄰	17
164	酉	364	釁	12
165	采	365	釋	3
166	里	366	釐	5
167	金	367	鑽鑽	39

## ある中露字典の漢字音について

168	長長	372	蹉	4
169	門	372	關	20
170	𠃉	375	隱	39
171	隶	380	隸	3
172	佳	380	難	18
173	雨	383	靈	22
174	青	386	靜	4
175	非	386	靡	3
176	面	387	禩	3
177	革	387	鞮	7
178	韋	388	韞	4
179	韭	389	螯	3
180	音	389	響	4
181	頁	390	顯	26
182	風	393	飄	3
183	飛	394	飜	2
184	食倉	394	饜	30
185	首	398	馘	3
186	香	398	馨	3
187	馬	399	驢	27
188	骨	401	體	4
189	高	402	莫	3
190	髟	402	髡	4
191	鬥	402	鬪鬪鬪	4
192	鬯	402	鬱	3
193	鬲	403	鬻	3
194	鬼	403	魔	6
195	魚	403	鰈	6
196	鳥	403	鷹	6

197	鹵	404	鹽鹵	3
198	鹿	404	麝	7
199	麥	404	麪麵	2
200	麻	404	麾	3
201	黃	405	黈	2
202	黍	405	黏	2
203	黑	405	黨	5
204	黻	405	黻	2
205	黽	406	鼈	3
206	鼎	406	鼈	2
207	鼓	406	鼓	2
208	鼠	406	鼠	1
209	鼻	407	鼷	3
210	齊	407	齋	2
211	齒	407	齡	3
212	龍	407	龐	3
213	龜	407	龜	1
214	龠	407	龠	1

本書の部首の配列順序は、玉部が玄部に先行している点を除けば、『康熙字典』と同じである。筆者が確認した特徴で、字書として稍気になるものを簡条書きで挙げると、以下のとおりである。

- (1) 部首によっては親字の画数がローマ数字で明記されているが、画数1は決して記されない。口部のように親字の画数を明記しない部も見られる。また、親字の画数に誤りが見られる箇所も有る。例えば、4画である「再」は46頁で3画と記されている。
- (2) 部首を終える箇所では、改行して当該部首に属する親字の総数がアラビア数字で記されている。しかし、土部のように実際に掲げる親字の数

と符合しないものも有る。

- (3) 親字の排列が画数順になっていない箇所が見られる。例えば、皿部では11画の「盥」よりも後に「盞」が立てられている。
- (4) 親字の選定に不可解な点が見られる。常用される漢字が必ずしも立てられず、難解な漢字で立てられているものが散見される。例えば、水部に「港」は見られないが、「漱」は親字として立てられている。
- (5) 親字が比較的稀な異体字で記されているものが見られる。例えば、167頁では「斷」が立てられている。
- (6) 親字に少数ながら誤字が見られる。また、誤字とは言えないものの、誤認を惹起する字形で記されている漢字は少なくない。例えば、149頁で「戎」が「戌」と誤認されかねない字形で記されている。

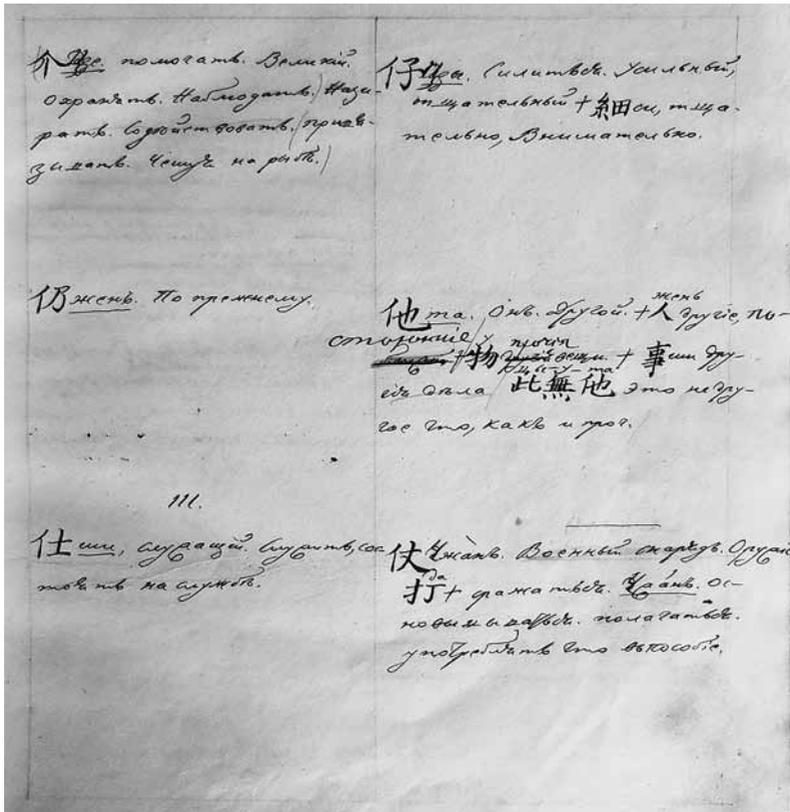
以上の各項は本書が稿本であり、猶も洗練を要する段階に在ったことを物語っている。このような資料に反映する言語の体系と特徴を考察するに当たっては、相応の用心が求められよう。小論では疑わしき音標は言語データとして扱わないことにする。但し、以上の各項がいずれも漢字の字形に関するものであり、字音に関するものではないことは強調しておきたい。声調が概ね不詳である点を除けば、言語資料として扱う上で特段の障碍は見受けられない。寧ろ貴重な資料となり得る。

本書の字典本文には次の順序で情報が排列されている。①親字、②字音、③釈義、④当該漢字を含む語例及びその語音と語義。①は漢字で記されている。②と③はキリル文字で記され、②には概して下線が施されている。④は必ずしも全ての親字に対して付されているわけではないが、付されている場合は、語例は漢字で記され、その語音と語義はキリル文字で記されている。次節では、小論の考察対象たる②字音と④語音を表す音標について述べる。

3. キリル文字音標

3.1. дз と дж

声母を表す дз と дж は、д が異なるインクでそれぞれ ц と ч で上書きされ、цз と чж に書き換えられている。この上書きは親字の字音全体に及んでいる



【図1】 дз が цз, дж が чж に書き換えられた例  
(本書22頁。ライデン大学図書館所蔵)

が、いつ誰の手によって為されたものかは不明である。語例の字音については、行われている箇所が多いが、行われず дз や дж のまま残っている箇所も見られる。例えば、8頁の親字「一」の語例「～見」は дзянь, 145頁の親字「慧」の語例「智～」は джи のまま残っている。

4.1. で後述するように、本書の дз と дж に対する小論の推定音価はそれぞれ \*ts と \*tʂ である。この2つの声母は、レオンティエフ (Алексѣй Леонтиев) によるロシア語訳『三字経』(1779年)では дз と дж, ビチューリン (Никита Яковлевич Бичурин) によるロシア語訳『三字経』(1829年)では дз と чж, ビチューリン著『漢文啓蒙』(1835年)では цз と чж で記されている。本書に見られる上書きは、この дз→цз, дж→чж という変遷に即して理解されるべきであろう。古い時期の表記を踏襲して一通り記されたものが、後に新しい時期の表記で以て書き換えられたものと考えられる。

### 3.2. e と ъ

韻母を表す e と ъ には、異なる声母を表す字母を選んで結合する傾向が見られる。表2に示すとおり、e は д, л 以外の字母と結合する。これに対して、ъ は主に д や л と結合して дѡ や лѡ で現れる。出現数でも e が ъ を遙に凌ぐ。両者は ъ とも結合するが、be と бѡ は同一の漢字「別」の音標として現れる<sup>10</sup>。

4.1. で後述するように、本書の д, л に対する小論の推定音価はそれぞれ \*t,

【表2】 本書に於ける e と ъ の出現状況  
(数字は親字の音標として現れた数。以下同)

	б	п	м	д	т	н	л	дз	ц	с	дж	ч	ш	ж	零声母
e	2	1	1		2	1		24	4	20	8	4	14	1	7
ѡ				3	1		6								

10 бѡ は親字の音標としては現れず、語例の音標として2例が現れる。

\*1であり、両者は歯茎音である点で共通している。恐らく e と ъ は、声母の違いに因る、韻頭もしくは韻腹に生じた聴覚印象の違いを反映するための選択であったと推測される。だが、筆者は韻頭もしくは韻腹に生じた聴覚印象の違いが何であったかを断定するには至っていない。よって、小論では暫定的に両者の音価をともに \*ie と推定する。

### 3.3. юе と юэ

韻母を表す юе と юэ には、異なる声母を表す字母を選んで結合する傾向は見られず、声母毎の出現数にも大きな差は見られない。そして、両者はともに中古音の入声字に対してのみ用いられ、且つ同一の漢字の音標としても現れる。「絶」や「訣」がそれである。敢えて両者の違いを指摘するならば、表3に示すとおり юе は声母を表す字母を冠しない、つまり音韻として零声母の音節でも現れる点に尽きる。

【表3】 本書に於ける юе と юэ の出現状況

	дз	ц	с	零声母
юе	5	2	2	6
юэ	4	1	2	

юе と юэ については、e と ъ のような韻頭もしくは韻腹に生じた聴覚印象の違いの反映と考えるのは難しい。両者は表記上の異体に過ぎないと考えるべきであろう。小論では両者の音価をともに \*ye と推定する。

### 3.4. oa と ya, ой と уй, оань と уань

韻母を表す oa と ya, ой と уй には、声母を表す字母との結合関係に於いて、同一の傾向が見られる。表4に示すとおり oa, ой はともに x とのみ結合し xoa, хой でのみ現れる。これに対して、ya, уй はともに主に x 以外の字母

【表4】 本書に於ける oa と ya, ой と уй, оань と уань の出現状況

	д	т	н	дз	ц	с	дж	ч	ш	ж	г	к	х
oa													7
ya								2			3	1	
ой													20
уй	2	3	1	3	1	6	3	3	4	2	11	8	1
оань													1
уань							7	5	4		4	6	6

と結合する<sup>11</sup>。一方で、оань と уань については、оань は хоань で1例現れるのみであり、x との結合でも уань が優勢を占める。

4.1. で後述するように、本書の x に対する小論の推定音価は無声軟口蓋摩擦音 \*x である。また、ya, уй の y に対しては狭母音 \*u を推定するのが妥当であろう。この前提に従うと、oa, ой の o は恐らく \*x の直後に起こる円唇性の韻腹 /u/ が \*u より \*o に近い音で実現したことを反映するものと推測される。そこで、小論では oa と ой の o に対しては \*o を推定する。oa/\*oa と ya/\*ua, ой/\*oi と уй/\*ui について、韻腹 /u/ は \*x の直後でのみ \*u よりやや広母音の異音 \*o で実現した、もしくはそのような聴覚印象を与えるものであったと考える。一方で、оань/\*oaŋ と уань/\*uaŋ については、оань が хоань で1例現れるのみであることから、\*x の直後で韻腹 /u/ が異音 \*o にて実現する頻度は低かったと思われる。

### 3.5. енъ と ынъ と энъ, енъ と ынъ と энъ<sup>12</sup>

韻母を表す енъ と ынъ と энъ には、異なる声母を表す字母を選んで結合す

11 хya は親字の音標としては現れないが、語例の音標で1例現れる。

12 4.2. で後述するように、末字の нь と нъ に対してはそれぞれ歯茎鼻音韻尾 \*-n と軟口蓋鼻音韻尾 \*-ŋ を推定する。

【表5】 本書に於け енъ と ынь と энъ, енъ と ынь と энъ の出現状況

	б	п	м	ф	в	д	т	н	л
енъ									
ынь		1	2	8					
энъ	2		1		8				
енъ									
ынь		3		11		3	3	2	1
энъ	1	1	7		1				

	дз	ц	дж	ч	ш	ж	г	к	х	零声母
енъ			14	9	10	9				
ынь									1	
энъ							3	2	1	1
енъ			13	12	13	1				
ынь										
энъ	6	1					2	2	6	

る傾向が見られる。表5に示すとおり енъ は дж, ч, ш, ж とのみ結合する。ынь は主に ф と結合する。энъ は б, м, в の他に г, к, х とともに結合する。енъ と ынь と энъ にもこれと似た傾向が見られる。енъ は дж, ч, ш, ж とのみ結合する。ынь は д, т, н, л の他に п, ф とともに結合する。энъ は б, п, м, в の他に г, к, х, そして дз, ц とともに結合する。

4.1. で後述するように、本書の б, п, м, ф, в に対して小論は唇音を推定する。д, т, н, л に対しては歯茎音（破擦・摩擦音以外）を推定する。дз と ц に対しては歯茎音（破擦音）を推定する。дж, ч, ш, ж に対しては反り舌音を推定する。г, к, х に対しては軟口蓋音を推定する。よって、енъ と ынь と энъ, そして енъ と ынь と энъ が結合する字母の違いは、基本的に声母の調音部位の違いに対応していることになる。恐らく、三者は声母の調音部位の違いに因って生じた、韻腹の音価の違いを反映するために選択されたものと推測される。換言すると、三者は異音の関係に在る可能性が高いということであ

る。

一見 *ЫНЬ* と *ЭНЬ*, *ЫНЬ* と *ЭНЬ* がそれぞれ対立を成すかに感じられる *б*, *п*, *м*, *ф*, *в* についても, *ЫНЬ* と *ЫНЬ* は *б*, *м*, *в* と結合する点で共通しており, *ЭНЬ* と *ЭНЬ* は *п*, *ф* と結合する点で共通している。つまり, 両者は声母を表す字母について, 寧ろ相補分布に近い関係を呈している。4. 1. で推定する音価は *б*, *м*, *в* がそれぞれ \**p*, \**m*, \**v* であり, *п*, *ф* がそれぞれ \**p<sup>h</sup>*, \**f* である。前者と後者の間には強い肺臓気流の放出の有無という違いが存在する。これは取りも直さず, 閉鎖の開放から声帯振動の開始までの時間, 即ち有声開始時間の長短で違いが存在することも意味する。これらの違いが, 後続する韻腹の音価もしくは聴覚印象の違いを引き起こし, それが異なる音標の選択に繋がったと考えるべきものであろう。

以上の分析を踏まえ, 異音の關係に在る可能性が高いという推測と, 各字母のロシア語での音価とを衡量し, 小論では *нь* もしくは *НЬ* が後続する *е*, *ы*, *э* に対して, それぞれ \**e*, \**ə*, \**ɜ* を推定する。この推定では, 反り舌音に後続するものは前舌半狭母音で, 軟口蓋音に後続するものは中舌半広母音で実現したことになり, 舌もしくは唇の調音運動に関する蓋然性の観点からも説得力を持つ。

### 3. 6. 声調を表す補助記号

本書では声調を表す補助記号として *ˉ*, *ˊ*, *ˋ*, *ˌ* が用いられ, それぞれ平声, 上声, 去声, 入声を表している。この記号体系は既にカトリック教会の宣教師が漢語の声調を表すために用いていた体系である。リッチ (Matteo Ricci) は『西字奇蹟』で陰平, 上声, 去声, 入声に対してこの記号を用いている (陽平に対しては *^* を用いている)<sup>13</sup>。この補助記号の使用は, 本書の編纂過程でカ

13 プロテスタント教会の宣教師でも, モリソン (Robert Morrison) が『A dictionary of the Chinese language』で上声, 去声, 入声について同じ記号を用いている (但し, 平声は無標)。

【表6】通撰字の音標と推定音価（声調を表す補助記号は省略した）

	蒙	公	封	龍
	通合一平東明	通合一平東見	通合三平鍾非	通合三平鍾來
Varo (1703)	mung/*muŋ	kung/*kuŋ	fung/*fuŋ	nung/*nuŋ 農 <sub>混</sub>
Guignes (1813)	mong/*moŋ	kong/*koŋ	fong/*foŋ	long/*loŋ
Morrison (1815-23)	mung/*muŋ	kung/*kuŋ	fung/*fuŋ	lung/*luŋ
Callery (1841)	mum/*muŋ	kum/*kuŋ	fum/*fuŋ	lum/*luŋ
Medhurst (1842-43)	mung/*muŋ	kung/*kuŋ	fung/*fuŋ	lung/*luŋ
本書	мэнь/*mɛŋ	гунь/*kuŋ	фынь/*fɛŋ	лунь/*luŋ

トリック教会の宣教師の手に成る漢語字典が参照された可能性を示すものである。そして、この補助記号は必ずしも言語事実に従って付されたものではないようだ。中古音の全濁上声字に去声でなく上声を表す補助記号が付されていることは、その一証左と言える。例えば、「動」の音標は дунь となっており、上声の補助記号が付されているが、中古音の全濁上声字は、現代官話音の絶対的多数の地点では去声で実現する。尚、本書では全ての漢字の音標に声調を表す補助記号が付されているわけではないが、筆者の行った調査では、補助記号の付加の有無について規則を見出すことはできなかった。

しかし、声母と韻母については、本書の漢字音は、在華したカトリック教会の宣教師、プロテスタント教会の宣教師、そしてシノロジストの手に成る、清朝期のリングフランカ「官話」を記した文献の漢字音と異なる特徴を示す。例えば、中古音の通撰字（入声字を除く）は、本書では幫・非組字とそれ以外とで韻母の音価を異にする。これは先行するリングフランカ「官話」の記録と一致しない特徴である。表6にヴァロの『Arte de la lengua mandarina』（1703年）、ギーニュ（Chrétien Louis Joseph de Guignes）の『Dictionnaire chinois, française et latin』（1813年）、モリソン（Robert Morrison）の『A dictionary of

the Chinese language』(1815-23年), キャレリー (Joseph-Marie Callery) の『Systema phoneticum scripturae sinicae』(1841年), メドハースト (Walter Henry Medhurst) の『Chinese and English dictionary』(1842-43年)に記される「官話」の音価との比較を行う。

表6からは、「官話」では幫・非組字「蒙」「封」とそれ以外「公」「龍(農)」とが、ともに円唇後舌狭母音を韻腹とする同一形式の韻母で実現するのに対し、本書では同一形式の韻母で実現せず、幫・非組字は非円唇母音を韻腹とすることが分かる。このことは、韻母について、本書の音標が先行する字典のラテン文字による音標をキリル文字に翻字したものではなく、「官話」とは異なる何らかの言語事実を反映すると考えるべきものであることを物語っている。

### 3.7. 音価推定の難しさ

本書には冒頭に声調を表す補助記号についての簡単な説明が施されているのみであり、キリル文字音標についての説明や凡例は設けられていない。そのため、その音価推定に当たっては、ロシア語の正書法だけではなく、相前後する時期のキリル文字による漢語文献の音標を参考にする必要が有る。

しかし、それで推定が容易に行えるわけではない。本書の音標と相前後する時期の、キリル文字による漢語文献の音標には、さして大きな変動が見られるわけではない。例えば、「山」の声母は本書のみならず、レオンティエフ訳『三字経』、ビチューリン訳『三字経』、ビチューリン著『漢文啓蒙』でも皆шで記されている。この字母шに対する推定音価として、\*ɣと\*ʃのどちらを選ぶかが、実は悩ましい問題である。現代語の音価の無批判な投影が、動もすると史料に記された文字情報の誤読に繋がることは言を俟たない<sup>14</sup>。しかも、現

---

14 吉川 (2014: 329(124); 209(154) 注 11) が批判している事例はその一例である。

代に於けるキリル文字による漢字音の表記法は、十九世紀のキリル文字表記法の系譜に列なる。つまり十九世紀のキリル文字による音標の改訂の上に成立したものである。故に、現代の表記法の字母と音価の関係を十九世紀の音標に当てはめると、循環論法に陥る危険性が有る。これに加えて、キリル文字による漢字音の表記には、その初期のものに於いて、満州文字で記された漢字音が関わった可能性が有り、ロシア語に於ける字母と音価の関係のみに立脚して推定を行うことで音声事実としての漢字音への到達を見込むのには不安が残る<sup>15</sup>。従って、音標の説明や凡例を欠いた文献については、関連する諸情報を勘案して音価推定を行い、音韻体系と音韻史に照らして蓋然性の乏しい形式を排除するという手続きを踏まねばならない。

以上述べた事柄に留意しつつ、次節では本書の音標とそれに対する筆者の推定音価を示す。

## 4. 推定音価とその体系

### 4.1. 声母

声母について、本書の音標とそれに対する筆者の推定音価の体系は以下に示すとおりである（零声母を含む）。表記上の異体は括弧内に付記した。дз と дж は、д がそれぞれ ц と ч で上書きされ、цз と чж に書き換えられているため、дз > цз と дж > чж で記す。

---

15 18世紀のロシア使節団の学生が漢語よりも満州語に接する機会が多かったことは、Скачков (1977: 45) がロッソヒン (Илларион Калинович Россохин) に関する行で指摘している。また、清朝とロシアの外交に於いて満州語をはじめとする複数の言語が関わっていたことについては柳澤 (2017) を参照されたい。

б/*p	п/*p <sup>h</sup>	м/*m	ф/*f	в/*v
波倍變白	普排判樸	麻美悶脈	父費法方	我味王
д/*t	т/*t <sup>h</sup> (ТЬ)	н/*n		л/*l
大底端得	妥頭炭特	女鬧逆農		路老粒良
дз > цз/*ts	ц/*ts <sup>h</sup>		с/*s	
家罪建足	且才勸屈		夏消習向	
дж > чж/*tʃ	ч/*tʃ <sup>h</sup>		ш/*ʃ	ж/*ʒ
助兆眞竹	茶醜出唱		蛇受實聖	如擾熱讓
г/*k	к/*k <sup>h</sup>		х/*x	
瓜告廣格	庫考康刻		化後活黃	
_/*∅				
夜兒引屋				

音標に関して以下の点を指摘する。(1) т は韻母 \*ɜ を表す字母 ɞ が後続する場合のみ、ТЬ で現れる。(2) 齒茎破擦・摩擦音声母 \*ts, \*ts<sup>h</sup>, \*s について、結合する韻母の違いにより調音部位が異なったことを窺わせる現象は見出されなかった。つまり、дзі, цюй, ся といった形式の推定音価をそれぞれ排他的に \*tʃi, \*tʃ<sup>h</sup>yi, \*ʃia と断定することはできない。よって小論ではロシア語の正書法に忠実に、齒茎音破擦・摩擦音のみを推定する。(3) в の音価に唇齒接近音 \*v でなく、有声唇齒摩擦音 \*v を推定する余地は有るが、母音 \*u を想定する余地はあまり無い。ва と уа, вай と уай, вань と уань, вань と уань, вэй と уэй, вэнь と унь, вэнь と унь は、いずれも対立を成さない。また、音節 y は現れるが、音節 ву は現れない。そのため、в の音価に母音 \*u を推定しても衝突は来さない。しかし、y の音価が \*u であることは、本書に現れる別の韻母 oy の音価が \*ou と推定されるべきものであることから、疑いを要しない。故に、в の音価には母音 \*u 以外を想定するのが望ましい。

4.2. 韻母

韻母について、本書の音標とそれに対する筆者の推定音価の体系は以下に示すとおりである。表記上の異体は括弧内に付記した。罫線枠で囲んだ2つの韻母は、声母との結合状況から判断して、異音もしくは自由変異の關係に在った、もしくは音声的に同一であったにも拘わらず直前に現れる声母の違いに起因する聴覚印象の違いが文字化されたと考えられるものである。

ы/*ɿ 私子	и/*i 低日	у/*u 書物	юй/*yɨ 徐玉
эль/*ɜɿ 兒二			
а/*a 他罰	я/*ia 牙甲	ya/*ua 瓜刷	
		oa/*ɔa 花滑	
э/*ɜ 河色	е/*ie 斜結		юе/*ye 雪月
	ѣ/*ie 列		(юэ)
о/*o 多莫	io/*io 了角		
	(iô, iö)		
ай/*ai 來宅	яй/*iai 涯	уай/*uai 快率	
эй/*ɛi 杯給		уй/*ui 推水	
		ой/*oi 灰毀	
ао/*aɔ 毛着	яо/*iaɔ 叫削		
оу/*ou 走肉	ю/*iu 秋六		
ань/*an 南然	янь/*ian 鹹電	уань/*uan 關軟	юань/*uan 圓犬
			(юуень)
энь/*ɜn 恩問	инь/*in 心近	унь/*un 嫩春	юнь/*yn 尋韻
ынь/*ɛn 門粉			
ень/*en 針忍			
ань/*aŋ 忙尚	янь/*iaŋ 想江	уань/*uaŋ 爽皇	
		оань/*ɔaŋ 蝗	

ЭНЬ/*зŋ 孟翁	ИНЬ/*iŋ 冰靜	УНЬ/*uŋ 同共	ЮНЬ/*yŋ 兄用
ЫНЬ/*əŋ 冷風			
ЕНЬ/*eŋ 生鄭			

音標に関して以下の点を指摘する。(1) ы は専ら齒茎破擦・摩擦音声母 \*ts, \*ts<sup>h</sup>, \*s を表す дз, ц, с に後続して現れる以外に, 「的」の音標として ды で現れる。ды は「我的」「有的」といった語形で記されており, 現代語と同じく軽声の音節 [tə] を表したものと考えられる。(2) эль については, ь が本書で専ら軟口蓋音韻尾 \*-ŋ を表す нь で用いられていることから, 直前の字母の表す字母に対して「舌先が上顎に付着しない」という意味を加えるべく用いられていると考え, 齒茎接近音を伴う \*ɜl を推定する。(3) io には表記上の異体として iô, iö が現れる。(4) 「原」の音標として 67 頁に юень が 1 例のみ現れる。これは \*yen という音声事実が反映したものと考えられるが, юань/\*yan の表記上の異体と見なす。(5) 本書の漢字音の基礎方言に声門閉鎖音韻尾 \*-ʔ が無かったと断言することは容易ではない。キリル文字による漢字音表記で声門閉鎖音韻尾を文字化した文献を, 筆者は寡聞にして知らない。しかしながら, ロシア語を表記する場合のキリル文字にはそもそも声門閉鎖音を表す字母が存在しない。ここに於いて 2 つの可能性が考えられる。一つは, キリル文字による全ての漢語文献が声門閉鎖音韻尾の無い方言を記した可能性である。もう一つは, キリル文字による漢語文献には, 声門閉鎖音韻尾の有る方言を記しながらも文字化しなかったものが含まれている可能性である。このどちらが真実であるか断定するためには, 更に多くの一次資料の収集とそれに対する精査が求められる。小論では暫定的に声門閉鎖音韻尾の無い韻母体系を提示する。小論の結語でも述べるが, 入声字の推定音価は, 同時代の特定の文献資料に記された漢字音の音価と基本的に符合する。このことは, 小論で行う声門閉鎖音韻尾の無い韻母体系の提示が正しい判断であることを支持するもので

ある。

#### 4.3. 声調

3.6. で述べたとおり、本書では全ての漢字の音標に声調を表す補助記号が付されているわけではない。そして、付された補助記号として必ずしも言語事実に従っているとは言えない。そのため、声調体系の全貌を明らかにすることはできない。

現代語ではその絶対的多数の地理的変種が、中古音の平声に対応する声調として陰平と陽平の2つを持つ。本書の音標の基礎方言もまた然りであったろうことは、想像に難くない。しかし、それを本書の音標から証明することは不可能だと言ってよい。例えば、現代語で陰平と陽平という異なる声調で実現する「燒」と「韶」には、本書では同一の音標 *maō* が付されている。両者が本書の音標の基礎方言に於いて異なる声調で実現したことを証明するのは不可能である。

その一方で、本書の音標の基礎方言に於いて、中古音の入声に対応する声調が存在していたか否か、つまり入声字が特有の調値で実現していたか、それとも他の声調（平上去）に合流していたかについては、極めて限定的ながらも推測が可能である。入声字の音標で、1例のみ入声以外の声調を表す補助記号が付されたものが有るからである。それは、92頁に記される「合」*xá*である。筆者はこれを音声事実に従って付されたものと考えている。

*xá*には去声を表す補助記号であるアキュート・アクセントが付されている。「合」は匣母字である。よって、本書の音標の基礎方言では、全濁入声字の中に去声に合流していたものが有ったと推測される。そして、この種の字音は開音節化していたと思われるため、声門閉鎖音韻尾を推定する必要は無い。「合」の音価は *\*x3ʔ*ではなく *\*x3*であったはずである。このことは4.2.で提示した声門閉鎖音韻尾が無い韻母体系が妥当であることを、微力ながら支持する

ものである。

尚、338 頁に記される入声字「賁」дж > чжа́й にもアキュート・アクセントが付されている。その音価は \*tʂai? ではなく \*tʂai であったはずである。但し、これについては「債」などの誤認である可能性を排除できないため、保留することにする。

#### 4.4. 音節表

声母と韻母の結合関係は以下のとおりである。4.2. で表記上の異体と見なしたものは収めていない。また、3.4 で論じた oa と ya, ой と уй, оань と уань については、それぞれ ya, уй, уань として収めた。

表中には掲げた漢字は、親字もしくは語例として本書に記された漢字である。極力舒声字を掲げるよう努めたが、平上去の違いは記していない。入声字を掲げざるを得なかった箇所は、漢字の右下に「。」を付した。

	ы/*ɣ	и/*i	y/*u	юй/*yi	эль/*ɜɪ
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v		比 皮 迷	部 普 母 婦		
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l		地 題 你 禮	堵 土 奴 爐	女 驢	
дз > цз/*ts п/*ts <sup>h</sup> с/*s	自 廁 四	計 奇 喜	租 粗 素	句 取 徐	
дж > чж/*tʂ ч/*tʂ <sup>h</sup> ш/*ʂ ж/*ʂ <sub>z</sub>		枝 持 事 日。	柱 初 書 汝		
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x			固 苦 呼		
_/*∅		以	吳	雨	而

ある中露字典の漢字音について

	a/*a	я/*ia	ya/*ua
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v	把 怕 馬 發。 瓦		
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l	打 他 拿 臘。		
дз > цз/*ts ц/*ts <sup>h</sup> с/*s	雜。	佳 恰。 下	
дж > чж/*tʃ ч/*tʃ <sup>h</sup> ш/*ʃ ж/*ʒ	詐 茶 沙		耍
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x			卦 誇 華
_/*∅		牙	

	ɔ/*ɜ	ɸ/*ie	e/*ie	ioe/*ye
ɸ/*p ɸ/*p <sup>h</sup> m/*m ɸ/*f b/*ɔ		別。	別。 ノ。 滅。	
ɸ/*t ɸ/*t <sup>h</sup> n/*n ɸ/*l	得。 特。  勒。	疊。 貼。  劣。	鐵。 孽。	
ɸɜ > ɸɜ/*ts ɸ/*ts <sup>h</sup> c/*s	澤。 測。 塞。		界 且 邪	絕。 缺。 穴。
ɸɸ > ɸɸ/*tɕ ɸ/*tɕ <sup>h</sup> ɸ/*ɕ ɸ/*z			這 車 蛇 熱。	
ɸ/*k ɸ/*k <sup>h</sup> x/*x	個 可 和			
_/*∅	餓		夜	月。

ある中露字典の漢字音について

	o/*o	io/*io	ai/*ai	yai/*iai	yai/*uai
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v	波 破 魔 佛。 我		敗 排 買  外		
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l	多 妥 懦 羅	虐。 了	代 太 礙 來		
дз > цз/*ts ц/*ts <sup>h</sup> с/*s	坐 錯 所	角。 瞧 學。	再 才		
дж > чж/*tʃ ч/*tʃ <sup>h</sup> ш/*ʃ ж/*ʒ	捉。 禿。 說。 弱。		債 柴		衰
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x	過 課 火		改 開 海		怪 快 淮
_/*∅		藥。	哀	埃	

	эй/*эi	уѳ/*ui	ао/*ао	яо/*iао	оу/*ou	ю/*iu
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v	備 培 美 飛 危		包 泡 毛	表 瓢 苗	謀 阜	
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l	內 雷	對 推 餃	道 討 鬧 牢	釣 條 鳥 料	豆 頭 漏	丟 牛 柳
дз > цз/*ts ц/*ts <sup>h</sup> с/*s	賊。	最 萃 隨	早 曹 嫂	叫 橋 小	走 瘦	舅 囚 休
дж > чж/*tʂ ч/*tʂ <sup>h</sup> ш/*ʂ ж/*ʂ <sub>ɹ</sub>		追 垂 誰 瑞	兆 鈔 燒 擾		州 醜 受 柔	
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x	給。 黑。	貴 葵 恢	告 考 毫		狗 口 後	
_//*∅			熬	要	偶	右

ある中露字典の漢字音について

	ань/*an	янь/*ian	уань/*uan	юань/*yan
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v	半 盤 滿 飯 完	變 篇 綿		
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l	淡 炭 南 爛	店 天 念 連	段 團 煖 亂	
дз > цз/*ts ц/*ts <sup>h</sup> с/*s	讚 殘 三	煎 鉛 縣	鑽 竄 酸	捐 權 選
дж > чж/*tʃ ч/*tʃ <sup>h</sup> ш/*ʃ ж/*ʒ	斬 產 山 然		專 船  軟	
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x	感 刊 汗		慣 寬 歡	
_/*∅	暗	言		圓

	энь/*зп	ынь/*эн	ень/*еп	инь/*ип	унь/*уп	юнь/*уп
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v	本  悶  問	噴 門 粉		貧 敏		
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l				林	頓 吞 嫩 輪	
дз > цз/*ts ц/*ts <sup>h</sup> с/*s				進 琴 信	尊 寸 損	軍 群 巡
дж > чж/*tʂ ч/*tʂ <sup>h</sup> ш/*ʂ ж/*ʂ <sub>z</sub>			陣 臣 深 人		準 春 舜 潤	
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x	根 肯 恨	狠			丨 困 昏	
_/*∅	恩			引		雲

ある中露字典の漢字音について

	анъ/*aŋ	янъ/*iaŋ	уанъ/*uaŋ
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v	邦 旁 忙 放 望		
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l	黨 唐  朗	娘 亮	
дз > цз/*ts ц/*ts <sup>h</sup> с/*s	葬 倉 桑	江 牆 像	
дж > чж/*tʂ ч/*tʂ <sup>h</sup> ш/*ʂ ж/*ʂ <sub>l</sub>	張 常 尙 讓		狀 牀 爽
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x	剛 康 行		廣 狂 荒
_/*∅	昂	羊	

	энь/*эп	ынь/*эп	ень/*еп	инь/*ип	унь/*уп	юнь/*уп
б/*p п/*p <sup>h</sup> м/*m ф/*f в/*v	崩 烹 夢  翁	朋  鳳		病 平 名		
д/*t т/*t <sup>h</sup> н/*n л/*l		登 疼 能 冷		鼎 停 凝 靈	動 痛 農 弄	
дз > цз/*ts ц/*ts <sup>h</sup> с/*s	怎 層			京 請 形	總 葱 松	冂 窮 胸
дж > чж/*tʂ ч/*tʂ <sup>h</sup> ш/*ʂ ж/*ʂ <sub>z</sub>			整 程 生 仍		忠 蟲  榮	
г/*k к/*k <sup>h</sup> х/*x	耕 坑 弘				宮 孔 紅	
_/*∅				硬		永

## 5. 漢字音の主な特徴

4.4. の音節表からは、本書の漢字音が声母について中古音との関係で以下の特徴を有することが分かる。

- (1) 全濁平声字で破裂・破擦音で実現するものは無声有気音で実現する。  
例えば、「皮」пи/\*p<sup>h</sup>i, 「殘」цань/\*ts<sup>h</sup>an。
- (2) 全濁仄声字で破裂・破擦音で実現するものは無声無気音で実現する。  
例えば、「代」дай/\*tai, 「絶」дз > цзюе/\*tsye。
- (3) 非組字に両唇音で実現するものは無く、唇齒音で実現する。例えば、「婦」фу/\*f u, 「望」вань/\*v<sup>h</sup>aŋ。
- (4) 知組字に齒茎破裂音で実現するものは無く、反り舌破擦音で実現する。例えば、「張」дж > чжань/\*tʂaŋ, 「陣」дж > чжень/\*tʂeŋ。
- (5) 日母字は止摂開口三等韻字を除き有声反り舌摩擦音 \*z で実現する。止摂開口三等韻字は零声母で実現する。例えば、「人」жень/\*zɛn, 「而」эль/\*zɿ。
- (6) 見・曉組字（疑母を除く）で齊齒・撮口呼韻母と結合するものは齒茎破擦・摩擦音で実現する。例えば、「句」дз > цзюй/\*tɕyi, 「形」синь/\*siŋ。
- (7) 疑母字で齊齒・撮口呼韻母と結合するものは大多数が零声母で実現する。例えば、「牙」я/\*ia, 「硬」инь/\*iŋ。

これらは現代語で中国北部に分布する諸方言に典型的な特徴である。

そして、本書の漢字音には十九世紀中期の北京方言を記したウェイド (Thomas Francis Wade) の『尋津録』と共通する重要な特徴が見られる<sup>16</sup>。以

---

16 ウェイドの言語観、及び彼がリンガフランカ「官話」と北京方言の関係をどう認識していたかについては吉川 (2015: 70-72) を参照されたい。

【表7】 戈韻字

	本書		『尋津録』 <sup>17</sup>	
	ɔ/*ɔ	o/*o	o/*o, ê/*ɣ	uo, wo/*uo
見組	戈    rɔ/*kɔ 訛    ɔ/*ɔ	鍋    ro/*ko 臥    wo/*ɬo	戈    ko/*ko 訛    ê/*ɣ o/*o	鍋    kuo/*kuo 臥    wo/*uo
曉組	禾    xɔ/*xɔ	火    xo/*xo	和    'ho/*xo	火    'huo/*xuo

【表8】 徳韻字と陌・麥韻字

	本書 <sup>18</sup>		『尋津録』	
	徳韻	陌・麥韻	徳韻	陌・麥韻
A層 B層	墨    mo/*mo	白    bo/*po бай/*pai	墨    mo/*mo	白    po/*po pai/*pai
A層 B層	北    бэй/*pzi	麥    май/*mai	北    pei/*pei	麥    mai/*mai

下に3点のみを指摘する。

- (8) 軟口蓋音声母は開口・合口呼韻母とのみ結合し、齊齒・撮口呼韻母とは結合しない。本書には ги/\*ki, кюй/\*k'hyi, хя/\*xia といった形式は現れない。
- (9) 果摂合口一等戈韻見・曉組字が2つの相異なる韻母に分かれて実現する。この2つの韻母は円唇性の音的要素の有無で異なる(表7)。
- (10) 曾摂開口一等徳韻字と梗摂開口二等陌・麥韻字にはともに2つの字音層が存在し、内一つの層(A層と称する)では両者は同一の韻母で実現し、もう一つの層(B層と称する)では相異なる韻母で実現する(表8)。

17 「和」には表中に掲げた形式以外に 'huo が現れる。その音価は \*xuo である。

18 「白」は親字の音標で бо, 附録(人名)の音標では бай で記される。

これらはリングフランカ「官話」には見られない特徴である。

## 6. 結語

小論ではライデン大学図書館所蔵の一冊の中露字典を基礎資料とし、そこにキリル文字で記された音標と漢字音の特徴について論じた。本書の漢字音は現代語で中国北部に分布する諸方言に典型的な特徴が顕著であり、且つ『尋津録』に記された漢字音と重要な特徴を共有する。このことは本書の基礎方言が十九世紀中期の北京方言に近い方言種であったことを意味する。また、紙幅の都合により逐一検証することはしないが、小論で示した漢字音、特に入声字の推定音価は、『尋津録』に記された漢字音の音価と基本的に符合する。その一端は前節の(10)に現れている。同時代の特定の文献資料に記された漢字音の音価との符合は、小論で行った声門閉鎖音韻尾の無い韻母体系の提示が正しい判断であったことを支持するものである。

これまで北京方言の漢字音を体系的に記した最古の欧文資料であると考えられてきた『尋津録』よりも約10年前に、北京方言に近い方言種の漢字音が大量にキリル文字で記録されていたことは、キリル文字を欧文に含めるか否かという問題を超越して、漢語史研究にとっての朗報であろう<sup>19</sup>。筆者が行った調査の結果では、本書に記される漢字音の延べ数(釈義、語例、付録、漢数字の音標も含める)は5,600に達する。

勿論、『尋津録』と一致しない点も無いわけではない。疑母字「碍」の音標 найはその一つであり、推定音価は \*nai である。『尋津録』での音標は ai、推定音価は \*ai であり、本書の音形とは声母を異にする。現代語では疑母洪音字

---

19 吉川(2015: 64-65)で取り上げられているように、メドウズ(Thomas Taylor Meadows)の1847年の記録など、北京方言を反映するより早い欧文資料は存在するが、断片的な情報しか記されていない。

「熬」が齒莖鼻音 \*n で実現する地点が河北省から黒竜江省にかけて、そして青海省から寧夏回族自治区にかけて存在することが曹（2008: 085）で示されている。この種の、現代では東北部や西北部に分布する方言との関係は検討に値しよう。本書の基礎方言が十九世紀に「京話」と称された北京方言、延いては中国北部の諸方言との関係で如何なる位置を占めるか、本書と京話資料との間に見られる不一致を手掛かりに、稿を改めて論じることにする。

## 参考文献

- 柳澤明. 2017. 「17～19世紀の露清外交と媒介言語」, 『北東アジア研究』別冊3: 147-162.
- 吉川雅之. 2014. 「レック編 *Lexilogus* に記される閩南語音の表記と体系」, 『東洋文化研究所紀要』165: 244-206 (119-157).
- 吉川雅之. 2015. 「十九世紀在华欧米人の官話像——階級変種・標準変種・地域変種」, 『ことばと社会』17: 51-80.
- Callery, Joseph-Marie. 1841. *Systema phoneticum scripturæ sinicæ, pars prima*. Macao: [s.n.]
- Guignes, Chrétien Louis Joseph de. 1813. *Dictionnaire chinois, français et latin, publié d'après l'ordre de Sa Majesté l'empereur et roi Napoléon le Grand*. Paris: Imprimerie impériale.
- Kuiper, Koos (comp.). 2005. *Catalogue of Chinese and Sino-Western Manuscripts in the Central Library of Leiden University*. Leiden: Legatum Warnerianum in Leiden University Library.
- Medhurst, Walter Henry. 1842-43. *Chinese and English Dictionary: Containing all the Words in the Chinese Imperial Dictionary, Arranged According to the Radicals*. Batavia: Parapattan.
- Morrison, Robert. 1815-23. *A Dictionary of the Chinese Language, in Three Parts*. Macao: East India Company's Press.
- Varo, Francisco. 1703. *Arte de la lengua mandarina*. Canton: [s.n.].
- Wade, Thomas Francis. 1859. *The Hsin chin lu, or, Book of Experiments; being the First of a Series of Contributions to the Study of Chinese*. Hongkong: Office of the "China

mail”. [尋津録]

曹志耘 (編). 2008. 『汉语方言地图集』 语音卷. 北京: 商务印书馆.

[Бичурин, Никита Яковлевич]. 1829. *Сань-цзы-цзин, или троесловіе: Съ литографированнымъ китайскимъ текстомъ, переведено съ китайскаго монахомъ Иакинфомъ*. С. Петербург: Печатано въ Типографіи Х. Гинца. [三字經]

[Бичурин, Никита Яковлевич]. 1835. *Хань-вынь ци-мынь: Китайская грамматика, сочиненная монахомъ Иакинфомъ*. С. Петербург: Литографіи Гемильяна. [漢文啓蒙]

Леонтьев, Алексѣй. 1779. *Букварь китайской: Состоящей изъ двухъ китайскихъ книжекъ, служить у китайцевъ для начальнаго обученія малолѣтнихъ дѣтей основаніемъ*. С. Петербург: При Императорской Академіи Наукъ. [三字經]

Качков, Петр Емельянович. (В.С. Мясников сопр.) 1977. *Очерки истории русского китаеведения*. Москва: Наука.



# The Cyrillic Transcription and Phonological Representation of Chinese Pronunciation in a Chinese-Russian Dictionary

Masayuki YOSHIKAWA

In this study, we examine the Cyrillic transcription and phonological representation of Chinese characters in a manuscript of Chinese-Russian dictionary from a collection at Leiden University Library. This dictionary, written in 1850, contains pronunciations of Chinese characters that are transcribed into the Cyrillic alphabet. The existing literature, however, has paid scant attention to it. We explain its philological significance and identify the phonetic values of the Cyrillic alphabet, followed by the phonetic values of the Chinese characters. In addition, we demonstrate that the Chinese pronunciations recorded in this dictionary reflected the pronunciation in a contemporary dialect spoken in North China with respect to the initials and rhymes, though it did not exactly reflect the contemporary pronunciation with respect to the tones. This is evidenced in that some phonetic features of the Chinese characters essentially correspond to those of Peking dialect recorded in Thomas Francis Wade's *Hsin Ching Lu* (1859) with respect to the initials and rhymes.